
勇者と魔王のロンド

連連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王のロンド

【Nコード】

N8819B

【作者名】

連連

【あらすじ】

魔王を倒し、世界を救うべく四勇者の一人に選ばれた少女と、奇しくも勇者に選ばれなかった主人公との触れ合い？を描く予定の作品です。

プロローグ（前書き）

文章が下手かもしれませんが、ご了承ください。

プロローグ

「貴様は魔王だ。決して人とは合いいれることはできない。例えそれが貴様の愛した女でもな」

そう言われた瞬間、エルクの目から涙が溢れた。今まで抑えていた感情が溢れ、エルクはぼろぼろと泣いた。

「若い、な……」

懐かしむような声でベルフェゴールが告げた。

「私にも一時おまえのような時期があった……」
哀しい声だった。

遠い記憶をみるようにベルフェゴールは優しく空を見つめる。まるでそこに昔の恋人がいるかのように……

「レナニア……。私は……。いや、私たちは正しかったのだろうか」

エルクがはっとしてベルフェゴールを見つめた。

そこにあったのは、不死王ベルフェゴールが最後に見せた人だったころの顔だった。

「！ベルフェゴール、あんた」

「なんて声だ……。おまえが悲しむ必要はない。これが運命なのだ。レナニア、今おまえのもとに……」

ベルフェゴールの体が薄く発光しはじめる。長い黒髪が白く風化し始め、そして砂になって崩れ落ちていった。

「ベルフェゴール、あんたも……」

エルクは涙を拭い顔をあげた。その炎のような紅い瞳には揺るぎない決意が現れていた。

第1話 月と太陽（前書き）

場面が飛び飛びになったりしたら、ごめんなさい。それはまだ、うまく文章での表現法をマスターしてないからです、う

第1話 月と太陽

第1話

「ねえ、すごいでしょ？これ、勇者の剣だよ」

エルナは得意げに、酒場の勇者見習いたちに自分の瞳のように蒼い刀身の剣を見せびらかした。すげー、っと彼らの間から感嘆の息がもれる。

「勇者の剣……。四勇者の一人に選ばれたんだな。英雄じゃないか」

誰かにそう言われ、エルナはさらに嬉しくなった。

エルナは酒場の隅を、ちらっと見た。そこにはエルクがいる。勇者見習いたちはエルナの周りに集まっているのに、彼一人だけが、机に肘をついて、つまらなそうにうなだれている。その理由を知っているエルナとしては、もう少し元気になって欲しいのに、と切なくなった。

「四勇者か、僕らの憧れだな。やっぱり仲間を探す旅にでるのかい？」

「うん」

とエルナは、頷いた。みんなは尊敬の眼差しでエルナを見つめる。

「エルナ、俺たちさ、お前のこと親の七光りだと思ってたけど、過小評価だったみたいだな」

「すごいよ！記念にそのきれいな金色の髪を一本くれないか？英雄の髪なんて、御利益がありそうだろう？」

エルナは有頂天になった。

「えっへん！もっと褒めて褒めて」

さらにみんながエルナを褒めそやす。

またもエルナはエルクを見た。するとエルクもこちらを見ていたようで、目があった。

彼の紅い瞳は、くすぶんだ炭のように輝きを失い、虚ろな目つきだった。そんな悲しい瞳をしないでエルク・・・・・、とエルナはますます哀しくなった。

そんな彼を元気にさせるため、エルナはエルクのそばに駆け寄った。

「ほら元気だしなよ。エルクも頑張ったじゃない」

なおもエルクは虚ろな目でエルナを見つめている。普段の彼からは想像できないすごい落ち込みようである。

「そういやエルク、お前勇者に選ばれなかったんだってな」

誰かが嫌味たらしく突っ込んだ。

あ・・・・・、とみんながその男を見た。金色の髪を肩まで伸ばした中性的な感じの青年が立っている。見た感じは美青年だが、性格は悪そうだった。シュテンリッヒ・ラウドだ、と誰かが言った。シュテンリッヒ・ラウド、確かその名には聞き覚えがあるとエルナは思った。勇者を目指す旅でエルナのパートナーの座をエルクと争った人物だ。

「お前程度の男が、エルナ姫と旅にでたのがそもその間違いなのだ」

「ラウド！」

エルナは叫んだ。何故自分が怒っているのか解らなかったが、とにかく腹が立ったのである。一瞬驚いた表情を浮かべたが、ラウドはすぐさまもとの嫌味らしい顔に戻っていた。

「エルナ・・・・・。もういいよ、充分だ」

予期せぬエルクの言葉に、エルナはたじろいだ。普段の彼ならラウドの態度に憤慨こそすれ、こんなふうな姿勢を見せられるなんて想像もしていなかったからだ。

「ふん、旅が終わって、さらに情けなくなったな」

ラウドは、エルクを軽蔑の目でにらんだ。いつもの嫌味を浮かべた瞳ではなく、ある種の失意を感じさせる目だった。

「何も知らないくせに・・・・・」

とエルクが呟いた。その言葉にエルナは思いつきエルクの頬を叩いた。

ピシィッ

小気味よい音が響いた。

「・・・・・・・・！何すんだ！痛いだろ」

「エルク、あなた、拗ねるのもいい加減にしなさいよ。確かに勇者に選ばれなかったのは辛いことだと思う。でもね、勇者候補になった時にこうなるかもしれないってことは予測できたでしょ？結局、精霊王アルマンディーはあなたを選ばなかった。今なら選ばれなかった理由が私にもわかるわ」

失意にも似た感情でエルナは叫んだ。

「私はね、エルクに喜んで欲しかった。私が勇者に選ばれたのを真っ先に喜んで欲しかったの！」

天使のような顔をしたエルナの表情が、寂しさと哀しさで歪んだ。蒼い瞳から大粒の涙がこぼれ落ちる。涙は彼女の白い頬を伝って雫になり地面に吸い込まれていった。

「違うよ。エルナは何もわかつちやいない。俺が言いたいのはそんなことじゃないんだ！」

エルクは立ち上がり、走りながら逃げるようにして酒場を出た。俺が悔しかったのは、勇者になれなかったからじゃない。エルナの役に立てなかったからなんだ・・・・・・・・、とエルクは心の中で何度も何度も繰り返し叫んだ。

エルクが酒場を飛び出してしばらくは沈黙が続いたが、またぽつぽつと会話が始まり、もとの状態に戻っていった。

エルク・・・・・・・・、と酒場の入口を心配そうにエルナは見つめていたが、また勇者見習いたちが周りに集まって話の続きをせがんできたので、さっきの続きを話始めた。

外は夕方だった。赤い夕日がエルクの褐色の肌を照らし、灰色の髪が赤味がかかる。まるで彼を包むかのように夕日は彼を照らし続けた。

・・・・・・？

エルクは何かと呼ばれた気がした。まるで頭の中に黒い霧がかかっているかのように、エルクは虚ろな目で声のほうに歩きだした。

向かった先は都一番の大図書館だった。この図書館は禁書などの門外不出の貴重な文献や、古代魔法の書物などが秘蔵されている王国自慢の大図書館である。

無意識に歩いていたエルクは図書館のある位置で意識を取り戻した。夕方だったからか、人は周りにいなかった。何故自分がこんなところにいるのか疑問に思う暇もなく、再び呼ばれた気がした。

エルクは膨大な本を見渡す。すると一冊の本が落ちてきた。その本のページが勝手にめくれていく。途中真っ黒なページを開いて本は止まった。

エルクの意識が飛ぶ。

次に気づいた時には、図書館ではなかった。

薄暗い空間。上も下もなく、ただそこにあるだけの不思議な世界。

「エルク・・・・・・」

・・・・・・！

何かが自分を呼んだ。この世のものとは思えない奇妙な声。声は黒い世界の四方八方から聞こえてくる。まるで世界そのものがエルクに語りかけてくるように。

「エルク・・・・・・。最後の月の王の末裔よ。時は来た。忌まわしき太陽の征服者どもから我らの聖地を奪い返すのだ」

「月の王？ 聖地を取り戻す？ どういうことだ・・・・・・？」

な、なんだ！？

突然黒い空間が一つの世界に変わった。

目の前に現れた物体に触れようとしたが、手はすり抜けた。どうやらただの映像のようだ。

そのヴィジョンでは、歪な形をした大きな塔が、幾本も規則的に空中に羅列している。

いったい何なのだろうかと考えていると、突然頭の中で誰かが叫んだ気がした。それが不意に口にでた。

アルバトロスだ！

「今よりもずっとずっと昔、創世神話く三人の王の伝説のころ。

く忘れられた世界へとよばれる時代があった。高度な文明を築いたそれは永く繁栄したが、ある日を境にその文明は姿を消した……

・」

！？

そいつは突然現れた。エルクは吃驚して後ずさった。目の前には男が立っている。いつ現れたかわからない不気味な男は、長い黒髪を足元にまで垂らし、鋭い切れ目を持ち、赤いマントを羽織っていた。黒い世界には似つかわしくない出で立ちのその男は再び過去を語り始める。

「それは突然この世界に現れた」

ヴィジョンが目まぐるしく変わる。

戦争……？

世界は紅く紅く燃えていた。エルクの瞳のように。

ヴィジョンには、大勢の戦士が戦っている。見たこともないような巨大な火の玉や、光の渦が戦士たちを飲み込んでゆき、世界はまた紅く紅く燃えていく。

魔法だ！、しかもこの魔法……、見たことがある。こんな強力なものじゃないけど、あの光の渦は確かに勇者魔法だ！、とエルクは叫んだ。

「そう、奴らは太陽の末裔。我らが祖先を滅ぼした侵略者……」

ヴィジョンがまた目まぐるしく変化し、もとの黒い世界に戻って

いった。

「君は、自分の中で己以外の声を聞いたことはあるかね？」

「な、とっ、突然何を言っているんだ！」

「聞いているのはこちらだ。答えたまえ」

男の妙な気迫にたじろいだエルクは仕方なく、わからない、と答えた。

「では聞くが、君は先ほど歪な塔を見てアルバトロスと叫んだが、何故そう思ったのかね」

「そ、それは頭の中で声がして……」

エルクははっとした。頭の中の声、自分が本来知るはずもないことに対する知識、この男が言っているのはどうやらそのことだったようだ。

「その顔はどうやら理解できたようだな。君が継承者だと確認できたよ。さて、本題はここからだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8819b/>

勇者と魔王のロンド

2010年11月27日05時51分発行